文章読本

丸谷才一

中公文庫

中公文庫 ©1980

文章読本

一九八〇年九月一〇日初版
一九九二年三月一五日12版

著者 丸谷才一

発行者 嶋中鵬二

整版 図書印刷
印刷 三晃印刷
カバー トーブロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-200761-5
Printed in Japan

中公文庫

文章読本

丸谷才一著

中央公論社

表紙・扉　白井晟一

目次

第一章　小説家と日本語　7
第二章　名文を読め　20
第三章　ちよつと気取つて書け　41
第四章　達意といふこと　58
第五章　新しい和漢混淆文　80
第六章　言葉の綾　106
第七章　言葉のゆかり　131
第八章　イメージと論理　152

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第九章　文体とレトリック　181
第十章　結構と脈絡　232
第十一章　目と耳と頭に訴へる　254
第十二章　現代文の条件　280
主要引用文献一覧　309
わたしの表記法について　316
解説　大野晋　319

文章読本

第一章　小説家と日本語

昭和九年、谷崎潤一郎が『文章讀本』をあらはしてのち、同じ題、あるいはよく似た題の本を三人の小説家が書いた。昭和二十五年の川端康成、昭和三十四年の三島由紀夫、昭和五十年の中村真一郎である。* そして今またわたしが『文章読本』なるものに取りかからうとする。

すなはちわづか半世紀にも満たないうちに、文章の書き方、味はひ方の手引が五人の小説家によつて作られるわけだが、考へてみればこれはずいぶん異様な文学史的現象ではないか。こんなことは明治大正にはなかつた。** 維新以前にはなほさらなかつた。とすれば、これら一連の『文章

* 昭和十二年の菊池寛の本は代作だし、同年の里見弴の本は子供のためのものだから、ここでは考慮に入れない。そして昭和二十九年の伊藤整の本は編著だから、これも除くことにする。

** ただし明治三十九年、田山花袋は『美文作法』を出した。

読本』は昭和文学の一特徴と見て差支へないものなのである。後世の文学史家は案外この五十年間を要約して、小説家が文章入門をものするかたはら小説を書いた時代とするかもしれない。

しかし、この一時期、なぜこんなに多くの『文章読本』が書かれたのだらうか。それも詩人や劇作家や批評家によつてではなく小説家によつて、すくなくとも小説を表藝とする文学者によつて、書かれたのだらうか。あるいは、これを逆に言へば、わたしの知る限り代表的な詩人や劇作家や批評家がこの手の仕事をしなかつたのはなぜだらうか。たとへば三好達治ならさういふ話にはきつと乗気になつたはずなのに、誰もそんな企劃を立てなかつたのはどういふわけなのか。こんなことを言ふと突飛な質問のやうに見えるかもしれないが、この突飛さにはかなりの意味がある。それは単に取上げるにふさはしい話題、答へ甲斐のある問、解くに価する謎であるだけではなく、新しい『文章読本』の最上の出だしとなるにちがひない。

だが、そのへんのところをじつくりと考へるには、谷崎の著書だけに話をしぼるほうが具合がいいし、さうするのはあながち不当な処置ではなからう。それは第一に最初の『文章読本』としてこの種の述作の型を定めた。第二に、川端、三島、中村三家の本が、もちろんそれぞれの美質はあるものの、全体としてはいづれもさほどの充実を誇ることができないのに、*これは格段に力のこもつた傑作なのである。ここで人は、たかが入門書に傑作とは大げさな、などと笑つてはいけない。たとへば荻生徂徠の『經子史要覽』のやうに、世にはときとしてさう形容するしかない手ほどきの本があるものなのだ。

もつとも、わたしは谷崎の『文章讀本』の論旨にことごとく同意するわけではない。といふのは、巨匠の藝談、初心者に与へる適切な忠告がたつぷりと語られる合間に、ふと、現役の藝術家の危険な願望、無謀な野心が打明けられ、いや、それくらゐならまあいいが、困つたことに、長い歳月にわたる読書と制作の生活がもたらした高い見識と鬱然たる学殖のあひだに、とつぜん、浅見ないし無思慮、あるいはすくなくとも用語の誤りが置かれるからだ。もちろん文章の達人だから、うつかりしてゐたのでは何となく読みすごし、さらには、さすがに大したものだなどと感心さへするやうに上手に書いてあるけれど、腰をすゑて仔細に読み進むとき、人はこの名著に含まれてゐる錯誤に驚くことにならう。

が、それにもかかはらず谷崎の『文章讀本』は依然として偉大である。あるいは、この薄い本の威容は区々たる意見の当否によるのではない。さうではなくて、むしろ、彼ほどの大才、彼ほどの教養と思考力の持主が初学案内の書にときとして浅見と謬想とを書きつけざるを得ないくらゐ切迫した状況で現代日本語といふ課題に全面的に立ち向つたこと、その壮大な悲劇性こそ『文章讀本』の威厳と魅惑の最大の理由であつた。このとき彼は安全な入門書をあらはしたのではなく、危険な宣言を発表したのである。

* ただし中村真一郎『文章読本』の前半はすこぶる示唆に富んでゐて、この前半に関する限り、川端や三島の本と同格にあつかふわけにはゆかない。なほついでに一言しておけば、川端の『新文章読本』は代作と言はれてゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なほ、ここでちよつと断つておく。わたしが彼の大才を言ひ教養を言つても、人はそれを当然のこととして認めるに相違ないが、彼の思考力となると果してどうだらうか。世にはその脆弱さを言ひ立てるならはしが確立してゐるやうに見受けられるからである。しかし、たとへば『陰翳禮讃』に見られるやうな文明批評の才とは、独自な直観を心のなかでゆつくりと育てながら体系化してゆく執拗さにほかならない。さういふ資質に彼以上めぐまれてゐる人は同時代に珍しかつたのではないか。また、『文章讀本』の冒頭における、言語とは何か文章とは何かといふ概括は、むづかしい術語などちつとも使はずにそして的確にこの二つの基本的な概念を定義してくれて、まことに頭にはいりやすい、名人藝の講義である。語学に秀でてゐた谷崎のことゆゑ英書を何冊も参看したかもしれないが、大事なのはその勉強の痕が見えないくらゐよく咀嚼してあることで、これはすなはち、言語とは何か文章とは何かといふ命題を自分の頭で考へ抜いたと同じい。といふ言ひ方がをかしいならば、自分の頭で考へ抜かうとしてゐるからこそ、他人の言説を然るべく参照することが可能なのである。この種の思考力にかけてもまた、彼をしのぐ者は、学者のなかにすら極めてすくなかつたとわたしは思ふ。ところが、さういふ彼でさへ奇妙な思ひ違ひをしてしまふくらゐ、現代日本語で文章を書くといふことについて論ずるのはむづかしい。そして彼は、惑乱に陥るくらゐ懸命に、みづからの信条を述べたのである。

谷崎の最大のあやまちは、眼目である第二章「文章の上達法」の劈頭に見ることができる。「文法的に正確なのが、必ずしも名文ではない。だから、文法に囚はれるな」と彼はまづ強調す

るのだが、不思議なことに彼の言ふ「文法」とは国文法すなはち日本語の文法のことではない。英文法のことである。かう言へば、まさかそんなことがあるものかと誰しも怪しむにちがひないけれど、わたしの説が信用できないなら、『文章讀本』のこの章を再読してもらひたい。文豪の権威に眼がくらまされてゐない限り、ただちに納得がゆくだらう。

つまり谷崎は極端な欧文脈の文章を書いてはいけないと教へてゐるのである。このことは自作『鮫人』の一節を例に取つて人称代名詞の多用を戒めるあたりに明らかだし、また、『雨月物語』巻頭の一篇の書き出しを引用して、この代表的名文には主語がないとか、時制がないとか指摘するのを見てもはつきりするはずだ。

もちろん谷崎の意識のなかでは英文法と国文法がいりまじつてゐるから、彼が「文法」と書いた箇所をいちいち「英文法」と直して読むわけにはゆかない。事態はもうすこし渾沌としてゐる。だが、肝心のところでは「文法」すなはち「英文法」と置けば話は明快になり、すらすらと呑込めるのである。たとへば次のやうに。

> 斯様に申しましても、私は英文法の必要を全然否定するのではありません。初學者に取つては、一應日本文を西洋流に組み立てた方が覺え易いと云ふのであつたら、それも一時の便法として已むを得ないでありませう。ですが、そんな風にして、曲りなりにも文章が書けるやうになりましたならば、今度は餘り英文法のことを考へずに、英文法のために措かれた煩瑣

な言葉を省くことに努め、國文の持つ簡素な形式に還元するやうに心がけるのが、名文を書く秘訣の一つなのであります。

これは「文法に囚はれないこと」の結語の部分だが、「文法」をいちいち「英文法」に直してみた（ただしゴチック体になつてゐる箇所は明朝（みんちょう）の活字に改めた）。この部分は、かう読んでこそ意味が通るはずで、原文のまま「文法」として置いたのでは、その「文法」と「日本文を西洋流に組み立て」ることとの関係はさつぱり判らない。「文法」が実は国文法ではなく英文法だからこそ、日本文を西洋ふうに書くなといふ教訓と結びつくのである。

日本語の文章の書き方を論ずるに当つて、文法にこだはるなと説く。それは一向かまはないが、しかしその文法が英文法だといふのはまことに奇妙な話である。それはたとへばテニスの心得を伝授するとき、水泳のつもりで手足を動かしてはいけないと教へるやうなもので、初心者でも判つてゐる当り前のことではないか。が、谷崎はその当り前のことを文章の秘訣の随一、肝要な心得、ほとんど奥儀に等しいものとして、熱意をこめて述べた。理由は簡単で、自分自身、英文法にさんざんこだはつて日本文を書きつづけ、つまり英文直訳体である欧文脈の文章を綴つたあげく、そのことの非を悟つたばかりだつたのである。英文法を無視して日本文を書け、英文直訳ふうに主語を置くな、英文直訳ふうに時制を用ゐるな、などといふのは、実は彼の自己批判の台詞（せりふ）にほかならない。

さういふ反省のきつかけになつたのは、日本の古典よりもむしろ、のちに谷崎松子となる人の恋文だつたらうといふのは、わたしのかねてからの推測である。その恋文はまだ発表されてゐないし、将来も公開される見込みはないかもしれない。が、それがどのやうな文体で書かれてゐたかは、彼女の著書『倚松庵の夢』に収められた随筆によつて見当がつく。それはまさしく英文法を顧慮しない文体だつたはずで、その艶書においてはかつての純粋な和文が現代の風俗のなかで生きてゐたにちがひない。そのやうに、当代の実生活において和文脈がいまだ生命力を失つてゐないだけではなく、いよいよみづみづしく美しいことをまのあたりに示されたとき、言葉の天才はたちまちにして影響を受けることになつたのであらう。女の手紙によるかういふ文体的回心は、いかにもこの小説家にふさはしい事件であつた。そして、恋文のやりとりの時期が終つたのち、このあでやかな刺戟をさらに持続し、延長し、増幅するため、改めてかずかずの古典、殊に王朝女流の物語類を読み返し、つひに『源氏物語』の翻訳にまで及ぶといふ操作は、谷崎の知的で方法的な努力をよく示すものと言はなければならない。

つまり『文章讀本』は彼の文体の変革を記念する本であつたが、重大なのは、谷崎自身の文体の危機がまた現代日本語の危機と重なり合つてゐたといふ形勢である。彼のやうな代表的な文学者が文体のことであれほど根本的に悩む以上、一時代の文学的・言語的状況を背負つてに決つてゐる、と言へばそれまでのことだけれど、とにかく『文章讀本』にはさういふ柄の大きさ、運命的な風格があつた。平野謙の重視する昭和十年前後といふ文学史的転換期を、文体論のほうから

よく表現してゐるのはこの本であらうし、おそらくこの本以外にはないに相違ない。

昭和十年は一九三五年である。いはゆる口語文の成立は明治中期のことゆゑ、以来ほぼ四十年が経つてゐたわけだ。この年月によつて口語文がいちおう完成したとは言へるかもしれない。かつての粗悪な、そして能力の乏しい新文体は、今、たいていのことは何とか書ける文体になつてゐた。が、その反面、明治大正のころの口語体がまだ漂はせてゐた文語体の名残りがすつかり失せ、あるいは骨格の弱い、あるいは風情のない、文体に変つたこともまた事実なのである。さういふ状況を最もよく示すのは、新感覚派とプロレタリア文学のあとを受けて登場したいはゆる昭和十年代作家の文章と、大正時代の文学の生き残りである人々（殊に谷崎その人と佐藤春夫）の文章との極端な対比にほかならない。そしてこのやうな文学史的事情の背景としては、三代にわたる西洋文明摂取によつて社会が変り、日本語の語彙が改まり、語法が乱れつづけたといふ急激な移り変り、常に普請中であり常に熟成を許さないわれわれの現代文明の基本的な性格があつた。関東大震災ののち十年以上の歳月が流れて徳川時代の遺風がまつたく消え失せ、さらに世界恐慌がわれわれの社会の安定をゆすぶつて、文明の混乱が飽和点に達した（と彼が感じた）とき、谷崎は二つの批判――文明論における『陰翳禮讃』と文体論における『文章讀本』を書いたのである。それはいづれも、浅薄な欧化主義がもたらした俗悪なもの、没趣味なものへの非難と攻撃、一種の反近代主義の提唱を主題としてゐた。

が、ここから話は複雑になるのだが、谷崎はこれだけ過去を悔い、自己を批判したにもかかは

らず、依然として欧文脈の文章を書いたのである。もちろん『文章讀本』の時期以後の作品では、たとへば『鮫人』などと違ひ、いつもきちんと主語があるといふわけではなかつた。人称代名詞がうるさくつきまとふわけでもなかつた。英文直訳ふうに時制を重んじて、過去のことなら過去形、現在のことなら現在形といふわけでもなかつた。しかしそれはいはば、以前よりは格段に洗練された、優れた訳し方になつたやうな変化、飛躍的な上達とも言ふべきものであつて、大本のところにあるものは相変らず欧文めいた構造なのである。彼はつひに欧文脈を捨てることができなかつた。このことは『細雪』を見ても、『少將滋幹の母』を見てもよく判るはずで、それは縹渺たる趣や模糊たる風情とはまつたく対立する、明晰な、いや、むしろ明確な文章で書かれてゐるのである。谷崎はおそらく自分の文体のかういふ性格を知つてゐたはずだ。そして、目標とするところとあまりにも距離がありすぎるのに苛立ちながら、『盲目物語』や『蘆刈』におけるあの平仮名たくさんの仕掛け、『春琴抄』の句読点をはぶく工夫などで、せめていくらかなりと明確さを減じようとしたのではないだらうか。

いつぞやわたしはドナルド・キーンに向つて、日本の現代作家では誰が読みやすいかと訊ねたことがあるが、彼が言下にあげたのは谷崎であつた。曖昧なところがちつともなくて、頭にはいりやすいのださうな。もちろんキーンの語学力は天才的なもので、たとへば平安朝のものを読んでさへわたしをしのぐかもしれない。しかし、さういふ才能の持主ではあつてもやはり英語が母国語だから、最も上質の欧文脈で書く谷崎が最も判りやすいといふのはよく納得がゆくことであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com